



『こころ』 続き

きのう『坊っちゃん』の話と関連させて、『こころ』にも金銭をめぐる問題が出て来ることを指摘しておいたが、紙面が足らなくなってしまう、個人的になんとか中途半端な気がするので、ちょっとだけ補足を書いておこう。というのも、授業で扱うのは教科書に出て来る「下」が中心にならざるを得ないわけだが、実は「上」の中にたくさんの謎が隠されていて、そこがなかなか面白いところでもあるからである。

ちなみに、「中」は今ひとつ面白さに欠ける印象を持つだろう。主人公である「私」の相続問題が語られる重要な章ではあるのだが、「上」と「下」の面白さに比べると、話の展開ももっさりしているし、話題も田舎社会での病気の話ときては、ぱっとしない印象になってしまうのは致し方ないだろう。

さて、「上」の話なのだが、あの冒頭部分はかなり重要な要素に満ちている。例えば、主人公は鎌倉に避暑に出かけて先生と出会うことになるわけだが、そもそもなんで鎌倉に出かけたのかというと、その理由は友だちに誘われたからであった。ところが、その友だちはすぐに故郷に呼び戻されてしまう。

この部分はうっかり読み飛ばしてしまいがちなのだが、実は、友だちにも故郷があって、そこから東京の大学に出てきていることがわかる。今、「友だちにも」と書いたが、実は主人公にも「中」で語られる故郷があるわけだし、さらにいえば、先生にも故郷があったことが思い浮かぶだろう。つまり、『こころ』という小説は、故郷を持つ青年が東京に出て来る話なのであり、冒頭の青年は故郷との関

係が切れておらず、先生は叔父の裏切りによって故郷との関係が切れており、そして、主人公は病気の父を放置して汽車に乗ったことにより、故郷との関係が揺らぎ始めていると考えることができるのである。お～！

たったあれだけの冒頭なのに、結構面白い発見があるでしょ？ ついでに言うと、もう一つ超重要な秘密が冒頭の段落（「私はその人を～使う気にはならない。」まで）にはあるのだが、それは「下」とも密接に関係してくる重要事項なので、授業でも必ず触れられるはずだから、お楽しみに。

*

先生は、財産の管理を任せていた叔父に騙されたことで人間不信に陥り、叔父との関係を清算するために、田舎の土地をすべて処分してお金にかえ、その利息で暮らしているわけだが、昨日の通信に関連させていえば、叔父との間に「おごる／おごられる」ような関係を成立させたくなかった先生は、すべてを金に換えることで叔父との紐帯を切り捨てた、つまり親族としての関係を失効させたといえるわけである。

そして、その利息を使ってする生活の余裕が、養家からの仕送りを失って困っているK（Kも東京に出てきた青年である！）に対する「おごる／おごられる」関係を秘密裏に築くことを促すことになり、それがあの悲劇を導き入れることになるのである…。

というわけで、『こころ』という作品はさまざま読みが可能である。余裕があったら、ぜひもう一度「上」の再読を。